



ああ、関川マラソン

教育長 津野庄一郎

6月15日、天候が心配された「第49回関川マラソン」は、傘がいない程度の小雨模様。ランナーにとっては暑くも寒くもない条件の下、午前8時15分、渡邊邸の前から12キロスタートのピストルを鳴らしました。一斉に飛び出したランナー達は、清流荒川や大石川を目にしながら、ゴールの「ふれあいどーむ」を目指します。途中、関川中学校の柔剣道場前ではバレーボール部の生徒が、六本杉や小見あたりでは、横断幕や団扇^{うちわ}をもった住民らが声援を送ります。

今年の参加登録者数は昨年を上回る1300人余り。北は北海道、西は大阪や兵庫、さらにはスウェーデンやオーストラリアからの外国人ランナーの姿も。毎年参加されている最高齢（89歳）の男性は、今年、3キロを見事に完走しました。元同僚や知人も参加した関川マラソンは、私にとって久しぶりの再会をかみしめる機会にもなりました。

村をあげてのこの大会、関川村スポーツ協会を中心に、念入りに準備を重ねたお陰で、大きな事故や怪我もなく終えられたことが何よりも有り難いことでした。「来年、50回大会お待ちしております！」と選手らに言葉をかける小池稔会長の笑顔がはじけます。

県内では運営スタッフの高齢化などで、マラソン大会を閉じようとする地域がある中、関川村はスポーツ協会やスポーツ推進委員の皆さん、教育課スタッフの連携が図られていること、そして、何より村民のスポーツを愛する風土が、今も変わらずにあることが継続の大きな力となっています。今年も小中学生やIVUSA（大学生）・谷人倶楽部等のボランティアの協力が光りました。関川村のイメージである「渡邊邸、大したもん蛇まつり」に加え、「UP - DOWN 関川マラソンは素晴らしい」という認知が広がりつつあります。関係された全ての皆様に心から感謝申し上げます。

<【写真】ゴールしたランナーに飲み物を差し出す小学生ボランティア>